

言語学

注意：日本語を母語としない受験者は英語で解答することも可能です。

(1) 日本語のテアル構文（例：「窓が開けてある」、「ゴミ置き場に畳が捨ててある」）の文法的・意味的特徴を記述しなさい。

(2) 国際音声記号 (IPA) の補助記号 [.] (小さい円形の記号) および [˘] (v字形の記号) がどのように用いられるか、これらの記号が付加される音のタイプを網羅しつつ音声学的観点から1ページ以内で説明しなさい。

(3) 次に引用するのは、日本語の起源についてのある考察である。この文の著者が用いている方法が、歴史言語学が従来用いてきた比較・再建の方法と異なる点を挙げた上で、問題点があれば指摘しなさい。

「(私は) ドラヴィダ語と日本語との関係について、日本人として四人目に着手した勘定になる。しかし、次の点で先人たちと違う道を選んだ。

その一つは、ドラヴィダ語族というような広大な語族全体を比較研究の対象と設定しなかったこと。その語族の中の具体的な一言語、タミル語一つを対象を特定したことである。(中略)

言語の系統の研究には、単語の対応もさることながら、結局のところ「比較文法」が最も重要なのである。日本語のような構造の言語では助詞・助動詞が文法上大切な役割をする。だから助詞・助動詞を含めての文法の比較によって始めて「同系語」としての証明が確定される。ところが助詞・助動詞は、日本語の場合、方言によって相違が甚しい。だからドラヴィダ語というような広汎な「集合体」を漫然と相手にすると、その中のさまざまに相違する助詞・助動詞の中のどれを取り上げて対応の有るなしを判断してよいか、それを確定できなくなる。

学者によっては「ドラヴィダ語の祖形を用いて比較する」などという。しかし「祖形」とは、すでにヨーロッパの言語学者がいうように、個々の研究者の作り出すフィクションにすぎない。

(中略) 現代日本語の方言の、地方によって実に多くの変種のある助詞・助動詞のどれを代表としてとるかについての決定は極めて困難である。それはドラヴィダ語にとっても同じはずである。

こうした実際的な手続きの上の困難を知るものは、何千キロ離れた言語を「語族」という単位で扱い、その助詞・助動詞の対応を立証することが、むしろ絶望に近いほど難しいだろうということ予想する。

つまり、比較の対象として「語族」を取り上げることは決して適切ではない。むしろ誤謬に近い。だから私はその道を選択しなかった。私はドラヴィダ語族の中から一つを選び、それを詳細厳密に研究することが必要と判断し、最も古い時代から多量の言語記録を持つタミル語を取り上げ、一貫して日本語との関係を追及することにした。」

(大野晋『日本語の起源 新版』岩波新書. 1994年 から引用)

(次頁に続く)

(4) フィールドワークにおいて以下のような言語データが得られた。この言語データにおいて観察できる形態論的プロセスについて形式と意味の両面から 1 ページ程度で記述しなさい。なお、記述において重要だと考える用語についてはその定義を明らかにしたうえで使用しなさい。

1.	makso	‘bright’	mamakso	‘very bright’
2.	papa	‘curious’	papapa	‘very curious’
3.	palpik	‘gentle’	papalpik	‘very gentle’
4.	nayupno	‘lively’	nayuyupno	‘very lively’
5.	nagito	‘bold’	nagigito	‘very bold’
6.	namakma	‘big’	namamakma	‘very big’
7.	pagdi	‘calm’	pagpagdi	‘calmer’
8.	dota	‘sharp’	dotdota	‘sharper’
9.	wakno	‘soft’	wakwakno	‘softer’
10.	nasupdo	‘quiet’	nasupsupdo	‘quieter’
11.	namaste	‘brave’	namasmaste	‘braver’
12.	nahata	‘strong’	nahathata	‘stronger’
13.	pagod	‘warm’	kapagodan	‘warmest’
14.	katpat	‘quick’	kakatpatan	‘quickest’
15.	kasa	‘clear’	kakasaan	‘clearest’
16.	namala	‘smooth’	kamalaan	‘smoothest’
17.	nazakti	‘deep’	kazaktian	‘deepest’
18.	namukno	‘wide’	kamuknoan	‘widest’

(5) 以下の言語学用語を、例を挙げつつ簡潔に説明しなさい。

- (a) 普遍文法 (Universal Grammar)
- (b) 音韻における透明性と不透明性 (transparency and opacity in phonology)
- (c) 文法化の経路 (grammaticalization paths)
- (d) 基層の干渉 (substrate/substratum interference)

【以上】